

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 21 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520257

研究課題名(和文)近世抄物の基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental study on poetry in Edo period

研究代表者

小野 泰央(ONO, YASUO)

ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：90280354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「標注」について分析することを目的とした。標注が近世漢文学のなかでいかなる位置にあるかを解明した。標注は、漢文に対して、主に漢文で注釈をしている注釈書である。それまでの中世に於ける抄物を受けながら、また相違するところもある。宋代または明代の文学理論を踏まえている。一方で、標注は近世漢詩とも関連がある。この研究はそれらの関係性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study I propose analyze about HYOCYU "標注" as literary text. HYOCYU is commentaries written in KANBUN and the language of commentaries. Although HYOCYU have some connection with SHOMONO "抄物", and have different point. HYOCYU is influenced by Song and Ming Dynasty literary critiques. On the other hand HYOCYU is some relevant with EDO poem. This study cleared the phenomenon of relation of them.

研究分野：日本漢文学

キーワード：近世詩論 標注

1. 研究開始当初の背景

近世漢文学のなかで漢詩に関する研究が特に主流であるものの、漢籍の注釈、特に抄物に関してはその基礎的な作業さえなされていない近世漢詩文の研究に対する視点からも、その交渉関係の可能性がある近世抄物の解明は急務である。

2. 研究の目的

詩文集における抄物を対象とする。まず近世の詩文集抄物の書誌的な調査をする。その上で、近世注釈書のなかの位置付けを行い、さらに中世抄物との接続を解明する。つぎに、詩文集に関する抄物が、近世の他の作品にどのように拘っていくのかを明らかにする。

3. 研究の方法

詩文に関する近世抄物を刊本・写本・版本ともに収集する。その上で、近世抄物の位置付けを行なう。横軸として、近世注釈との詩論の交渉について整理し、そこから中国注釈の説と中世との説を判別する。

4. 研究成果

(1) 葛西因是の『通俗唐詩解』にも寓意が確認され、それは同様に金聖歎詩論に依拠していることが理解される。葛西因是は金聖歎詩論の「前後解」と「諷託」は表裏の関係を成していると考え、さらに自らの詩論においてもそのことを実践している。葛西因是の語や句の一詩中での機能に関する解釈には金聖歎の「前後解」に依拠しない論があるように、その寓意にも金聖歎詩論に依拠しない論を見出すことができる。葛西因是は唐の律詩に、情緒・諷託が幽遠であり、同時に字句が典麗であるとする。ここに葛西因是が唐の律詩を推奨する所以がある。葛西因是は金聖歎の注釈にも同様に「前後解」と「諷託」があるとし、それらは表裏の関係を成していると考えていた。つまり、語と語、句と句の関係を過度に取ることが、過度に寓意を取ることと自然と繋がっているとした。この両者を葛西因是は自ら詩論に受容している。ただ葛西因是詩論は、金聖歎詩論に収まらない。その機能的な解釈が元代詩論から続く格論にその淵源を確認することができるように、その寓意もまた金聖歎以外の詩論と決して無関係ではない。これが葛西因是の『通俗唐詩解』における詩論の骨格である。

(2) 宇都宮遯庵(寛永十年<一六三三>~宝永六年<一七〇九>)は岩国に生まれ、京都において松永尺五の門人となる。近世における詩文標注者のなかでも、遯庵の注釈活動は群を抜いている。彼が注釈の対象とした詩文集は、『錦繡段』『古文真宝前集』『三体詩』『杜律集解』『千家詩』『国朝七子詩集』と幅広いが、特に『錦繡段』への注釈は頻繁であった。唯一の抄物である万治

四年(一六六一)の『頭書錦繡段抄』を始めとして、寛文四年(一六六四)の『錦繡段首書』、貞享元年(一六八四)の『錦繡段首書』、元禄十五年(一七〇二)の『錦繡段詳註』の標注を制作している。その『錦繡段』は、遯庵にとって創作する上でも重要な詩集であった。彼には『遯庵詩集』という詩集と『遯庵先生文集』という詩文集が存在するが、それら詩には、『錦繡段』の詩句引用が色濃く見られるからである。『遯庵詩集』を紐解くと、類型的な表現や詩の構成が目につく。その類型的な表現の源の一つとして、『錦繡段』が挙げられる。表現を類型的にせざるを得なかった理由として、詩の制約が挙げられる。類型表現受容はともに二四不同に叶っている。同様に詩の押韻をする際にも、遯庵は『錦繡段』を活用していると考えられる。遯庵が『錦繡段』の押韻・平仄を参考にしながら作詩をしていたとするならば、それは構造的に一詩を受容していたということでもある。その入り組んだ念入りな受容は、やはり彼の四度の注釈によって培われたものであると考えられる。遯庵の漢詩における『錦繡段』受容には、その注記を介さなければ、理解できないようは受容も見られるからである。遯庵が『錦繡段』のみならず『錦繡段』標注を用いて、作詩を行ったことは極めて理知的な所為であるといえるが、その『錦繡段』依拠は、さらに彼の生活まで及ぶ。

(3) 近世の漢学者宇都宮遯庵の注釈活動は勢力的であった。なかでも『錦繡段』に関して、計四度の注釈を行い、さらに抄物と標注の双方を制作したことは、ともに特異である。ただ抄物の『頭書錦繡段抄』がその抄文をそれまでの抄物によりつつも、頭書には、後の『錦繡段首書』『錦繡段詳註』における注文が確認されるという点では、抄物の段階ですでに標注の準備は始まっていたことになる。三度の改訂の過程において、宇都宮遯庵は、二字熟語の用例を挙げると意識を強くする。その用例列挙のために辞書の利用、特に『五車韻瑞』の活用は顕著である。一方で、実際に、漢籍を通読しながら用例を拾っていたと考えられる。岩国徴古館には、彼の書物が現存しており、そのなかには『詩経』や『聯珠詩格』の豊字を収録した『字控(仮題)』と、『文選』と将棋の詩の句を抄出した『諸書(文選・象棋詩外)抄録』という手控え書があって、これらの記述と『錦繡段首書』『錦繡段詳註』の注文が共通することは、その地道な作業を推測させてくれる。改定を重ねて、厳選なる用例を列挙しようとしたのは、もちろん実証的で、厳密な解釈を行うことにはあったであろうが、『錦繡段首書』『錦繡段詳註』の『錦繡段』本文には押韻の韻字が示されていることから、それは作詩のためでもあったはずである。実際に『遯庵詩

集』『遯庵先生文集』には、『錦繡段』を典拠とする表現が相当数見られ、さらに『錦繡段』の注記を踏まえた表現も確認される。典故のある熟語ではなく、例えば所謂置字のような一般的な熟語に対してまでも、複数の用例を挙げようとする意識は、それまでの中国と日本の注釈書には見られない。それは宇都宮遯庵のその手法が当時において突出していたことを示している。ただこの手法は、現代の研究者が漢詩を注釈するときの基本的態度であることを考えると、宇都宮遯庵の標注は現代における漢詩研究の先駆けであるともいえるのである。

(4) 江戸時代中期の漢学者、葛西因是(一七六四～一八二三)の唐詩への注『通俗唐詩解』はその解釈において特異である。詩における語および語句の対応関係を、過度に読み取っているからである。その葛西因是の『通俗唐詩解』の解釈は、清代の学者、金聖歎の『貫華堂選批唐才子詩集』などの詩論からその発想を得ている。ただし、葛西因是は注を付ける際に、『貫華堂選批唐才子詩集』における同一詩の解釈をそのまま踏襲しているわけではない。金聖歎詩論を踏み台にして、これでもかと語句と語句の関係を取ろうとする葛西因是の意識には、次第に解釈がエスカレートしていく意識が見て取れる。それはあたかもあえて金聖歎詩論を超えようとしているかのようでもある。葛西因是の詩論は、金聖歎詩論とは別に、明・清代の詩論の受容を行っている。その明・清代詩論の淵源は元代詩論である。元代詩論における格論は『杜陵詩律五十一格』『詩解』から始まると言える。この語と語の関係・句と句の関係を執拗に取ることは、元代詩論に端を発して明代の『氷川詩式』に受け継がれ、さらには金聖歎に至って最高潮になる。これが葛西因是詩論における原拠の骨子である。句と句、語句と語句の関係を本格的に取り上げることは、室町時代後期の『続錦繡段抄』から主として始まる。それが荻生徂徠の『絶句解』においてさらに具現化する。葛西因是詩論はその延長線上にある。ただ葛西因是詩論以前に『氷川詩式』あるいは『雅倫』、さらには金聖歎の詩論のような複雑な語と語の関係を本格的に受容した詩論は未見である。その点で、冒頭に帰って、葛西因是の金聖歎受容は、先学が指摘するとおり、今のところ特異であるといえる。葛西因是以後、過度なる解釈を受け継いだのは、津坂東陽の『杜律詳解』である。さらにその後のことについては未だ調査が行き届いていないが、このような解釈が普遍化されたとは到底考えられない。以上が葛西因是詩論の文学史上における位置づけである。

(5) 彰考館文庫蔵『詩集』に集録されている、平安末期の詩人藤原顛業(一〇八九～一一四八年)の「元旦」という詩には、

「此詩集句乎」との貼紙が付されている。集句とは、古句を集めて一首を成すという手法の詩で、現に、顛業の詩も杜甫等の句にその典拠が確認される。集句は中国宋代に流行り、王安石(一〇二一年～一〇八六年)の作が最も長じていたとされる。とすると、顛業の作はいまのところ、平安詩における宋詩受容の唯一の例ということになるのか。集句は別に古代朝鮮にも存在した。『東文選』に採られる林惟正(明宗<在位一一七〇年～一一九七年>の時の人)の詩は、そのすべてが集句である。なかには王安石の句も確認されるので、その集句も王安石の作を意識していたことが分かる。これら三国における集句の存在は、十一世紀の宋詩から十二世紀の平安朝詩および朝鮮詩への流れを示しており、それは古代における東アジア文化圏の姿態をも物語っていることになる。一方で、集句の展開においては、三国のなかで日本だけが異なる。中国においては、元・明代においても集句は作られ、朝鮮においても、林惟正以後、十四世紀から集句が散見するが、日本においては、江戸時代まで集句は本格的には作られていない。ただ日本の五山においては、一句をそのまま詩のなかに組み込んで作成した詩、つまり集句的な詩が確認されるだけである。総じて、この中国宋代に流行った集句の受容という視点から、韓国と比較することによって、日本における中国文学受容を相対化することができる。日本においては、韓国より早く集句を受容した一方で、特に五山においては、集句を作成することに潔くなかった。こう見たときに初めて、日本五山文学の一齣が浮かび上がってくるのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

小野泰央、宇都宮遯庵の注釈方法とその変遷 『錦繡段』標注を中心として、和漢比較文学、査読有、第54号、2015、pp.38-53

小野泰央、集句の起源、中央大学国文、査読有、第57号、2014、pp.24-33

〔学会発表〕(計1件)

小野泰央、抄物から注釈書へ 宇都宮遯庵の評釈方法とその過程、和漢比較文学学会例會、2014、於和洋女子大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小野泰央 (ONO, Yasuo)  
ノートルダム清心女子大学・文学部・日本語  
日本文学科・教授  
研究者番号：90280354

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：